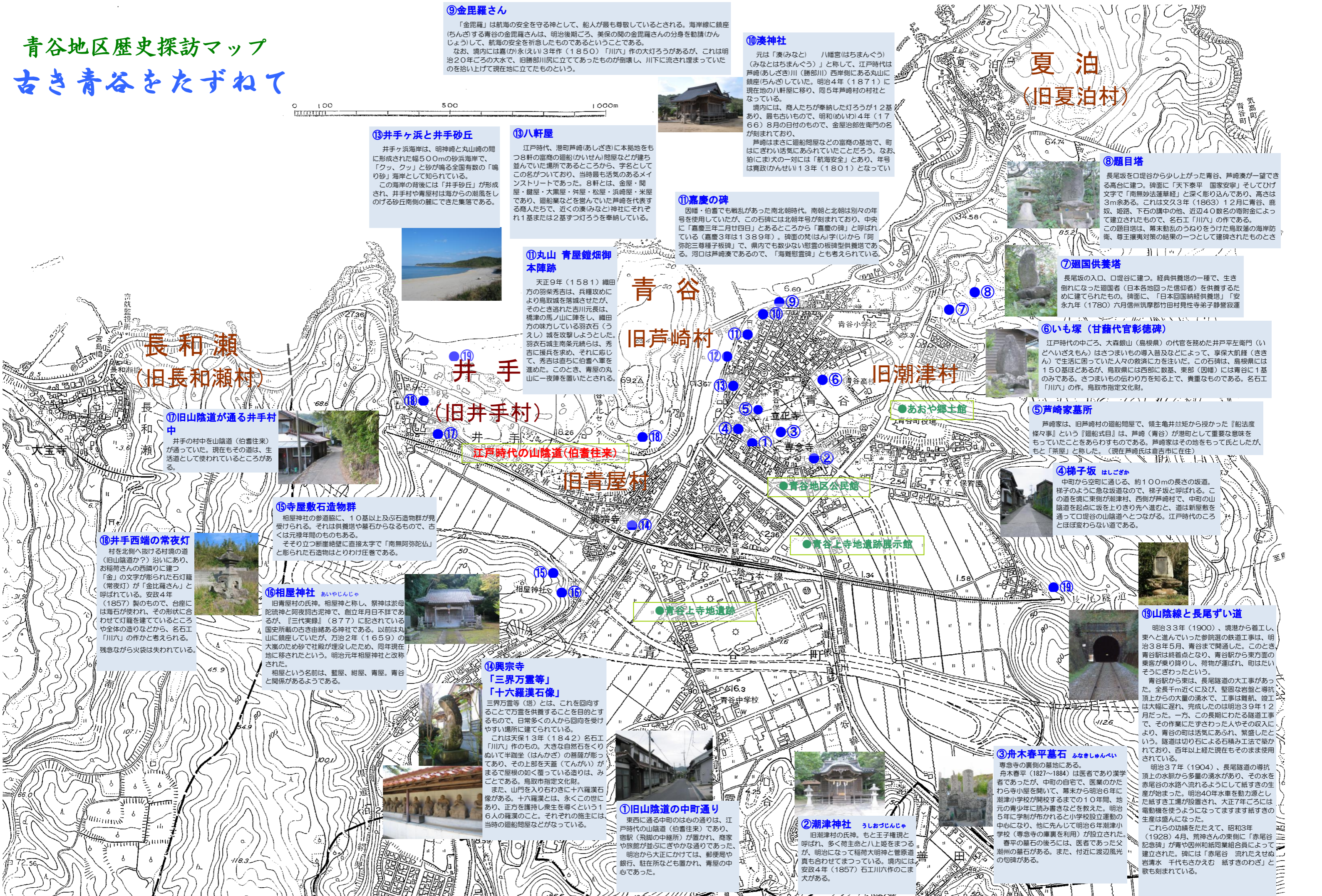
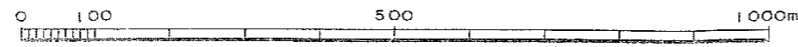


青谷地区歴史探訪マップ

古き青谷をたずねて



⑨金毘羅さん
「金毘羅」は航海の安全を守る神として、船人が最も尊敬していると考えられる。海岸線に鎮座(ちんざ)する青谷の金毘羅さんは、明治後期ごろ、美保の関の金毘羅さんの分身を勧請(かんじょう)して、航海の安全を祈念したものであるということである。
なお、境内には嘉(か)永(えい)3年作(1850)「川六」作の大灯ろうがあるが、これは明治20年ごろの大水で、旧勝部川尻に立ててあったものが倒壊し、川下に流れ去ってしまったのを拾い上げて現在地に立てたものという。



⑩湊神社
元は「湊(みなと) 八幡宮(はちまんぐう) (みなとはちまんぐう)」と称して、江戸時代は芦崎(あしざき)川(勝部川)西岸側にある丸山に鎮座(ちんざ)していた。明治4年(1871)に現在地の八軒屋に移り、同年芦崎村の村社となっている。
境内には、商人たちが奉納した灯ろうが12基あり、最も古いもので、明和(めいわ)4年(1766)8月の日付のもので、金屋治郎佐衛門の名が刻まれており、
芦崎はまさに廻船問屋などの富商の基地で、町はにぎわい活気にあふれていたことだろう。なお、殆(たいてい)にま犬の対には「航海安全」とあり、年号は寛政(かんせい)13年(1801)となってい

⑬井手ヶ浜と井手砂丘
井手ヶ浜海岸は、明神崎と丸山崎の間に形成された幅500mの砂浜海岸で、「クッ、クッ」と砂が鳴る全国有数の「鳴り砂」海岸として知られている。
この海岸の背後には「井手砂丘」が形成され、井手村や青屋村は海からの潮風をしのげる砂丘南側の麓にできた集落である。



⑬八軒屋
江戸時代、港町芦崎(あしざき)に本拠地をもつ8軒の富商の廻船(かいせん)問屋などが建ち並んでいた場所であるところから、字名としてこの名がついており、当時最も活気のあるメインストリートであった。8軒とは、金屋・関屋・健屋・大黒屋・外屋・松屋・浜崎屋・米屋であり、廻船業などを営んでいた芦崎を代表する商人たちで、近くの湊(みなと)神社にそれぞれ1基または2基ずつ灯ろうを奉納している。

⑪嘉慶の碑
因幡・伯耆でも戦乱があった南北朝時代。南朝と北朝は別々の年号を使用していたが、この石碑には北朝年号が刻まれており、中央に「嘉慶三年二月廿四日」とあるところから「嘉慶の碑」と呼ばれている(嘉慶3年は1389年)。碑面の梵(はん)字(じ)から「阿彌陀三尊種子板碑」で、県内でも数少ない懸崖(けんげん)の板碑型(ばんぺいがた)供養塔(くやうた)である。河口は芦崎湊(あしざきみなと)であるので、「海難慰霊碑」とも考えられている。

⑪丸山 青屋鍾御本陣跡
天正9年(1581)織田方の羽柴秀吉は、兵庫攻めにより鳥取城を落城させたが、そのとき逃れた吉川元長は、橋津の馬ノ山に陣をし、織田方の味方している羽衣石(うえし)城を攻撃しようとした。羽衣石城主南条元統は、秀吉に援兵を求め、それに応じて、秀吉は直ちに伯耆へ軍を進めた。このとき、青屋の丸山に一夜陣を置いたとされる。

長和瀬 (旧長和瀬村)

井手 (旧井手村)

青谷 (旧芦崎村)

旧潮津村

夏泊 (旧夏泊村)

⑬旧山陰道が通る井手村中
井手の村中を山陰道(伯耆往来)が通っていた。現在もその道は、生活道として使われているところがある。



江戸時代の山陰道(伯耆往来)

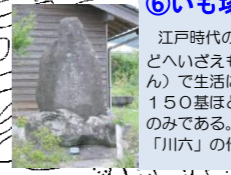
⑧題目塔
長尾坂を口堤谷から少し上がった青谷、芦崎湊が一望できる高台に建つ。碑面に「天下泰平 国家安寧」そしてひげ文字で「南無妙法蓮華經」と深く彫り込んであり、高さは3m余ある。これは文久3年(1863)12月に青谷、鹿奴、姫路、下石の諸中の他、近辺40数名の寄附金によって建立されたもので、名石工「川六」の作である。
この題目塔は、幕末動乱のうねりをうけた鳥取藩の海岸防衛、尊王攘夷(そんわうじやうい)の結果の一つとして建碑されたものと



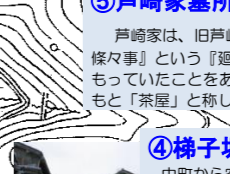
⑦廻国供養塔
長尾坂の入口、口堤谷に建つ。經典供養塔(きんげんくやうた)の一種で、生き倒れになった廻国者(日本各地回った信仰者)を供養するために建てられたもの。碑面に、「日本回國納経供養塔」「安永九年(1780)六月徳州筑摩郡竹田村見性寺弟子静養寂蓮



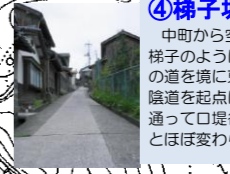
⑥いも塚 (甘藷代官彰徳碑)
江戸時代の中ごろ、大森銀山(島根県)の代官を務めた井戸平左衛門(いどへいざえもん)はさつまいもの導入普及などによって、享保大飢饉(ききん)で生活に困っていた人々の救済に力を注いだ。この石碑は、島根県には150基ほどあるが、鳥取県には西部に数基、東部(因幡)には青谷に1基のみである。さつまいもの伝わり方を知る上で、貴重なものである。名石工「川六」の作。鳥取市指定文化財。



⑤芦崎家墓所
芦崎家は、旧芦崎村の廻船問屋で、領主亀井茲矩から授かった『船法度條々事』という『廻船式目』は、芦崎(青谷)が港町として重要な意味をもっていたことをあらわすものである。芦崎家はその地をもって氏としたが、もと「茶屋」と称した。(現在芦崎氏は倉吉市に在住)



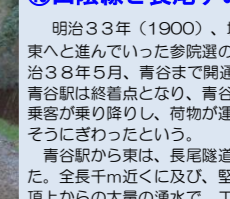
④梯子坂 はしごが
中町から空町に通じる、約100mの長さの坂道。梯子のように急な坂道なので、梯子坂と呼ばれる。この道を境に東側が潮津村、西側が芦崎村で、中町の山陰道を起点に坂を上りきり先へ進むと、道は新屋敷を通って口堤谷の山陰道へとつながる。江戸時代のころとほぼ変わらない道である。



⑬山陰線と長尾ざい道
明治33年(1900)、境港から善工し、東へと進んでいった参院選の鉄道工事は、明治38年5月、青谷まで開通した。このとき青谷駅は終着点となり、青谷駅から東方方面の乗客が降り、荷物が運ばれ、町はたいそうにぎわったという。
青谷駅から東は、長尾隧道の大工事があった。全長1km近く及び、堅固な岩盤と導坑頂上からの大量の湧水で、工事は難航、竣工は大幅に遅れ、完成したのは明治39年12月だった。一方、この長期にわたる隧道工事で、その作業にたずさわった人やその収入により、青谷の町は活気にあふれ、繁盛したという。隧道は切り石による石積み工法で築かれており、百年以上経た現在もそのまま使用されている。



③舟木春平墓石 ふなきしゅんぺい
専念寺の裏側の墓地にある。舟木春平(1827~1884)は医者であり漢学者であったが、中町の自宅で、医業のかたわら寺小屋を開いて、幕末から明治6年に潮津小学校が開校するまでの10年間、地元元青少年に読み書きなどを教えた。明治5年に学制が布かれると小学校設立運動の中心になり、他に先んじて明治6年潮津小学校(専念寺の庫裏を利用)が設立された。春平の墓石の後ろには、医者であった父潮洲の墓石がある。また、付近に渡辺風光の句碑がある。
これらの功績をたたえて、昭和3年(1928)4月、荒神さんの東側に「赤尾谷記念碑」が青や因州和紙同業組合員によって建立された。碑には「赤尾谷 流れたせせぬ 岩清水 千代たしかえむ 紙すきのわざ」と歌も刻まれている。



⑩井手西端の常夜灯
村を北側へ抜ける村境の道(旧山陰道か?)沿いにあり、お稲荷さんの西側に建つ「金」の文字が彫られた石灯籠(常夜灯)が「金比羅さん」と呼ばれている。安政4年(1857)製のもので、台座には海石が使われ、その形状に合わせて灯籠を建てているところや全体の造りなどから、名石工「川六」の作かと考えられる。残念ながら火袋は失われている。



⑮寺屋敷石造物群
相屋神社の参道脇に、10基以上及び石造物群が見受けられる。それは供養塔や墓石からなるもので、古くは元禄年間のものである。そそり立つ断崖絶壁に直接太字で「南無阿彌陀仏」と彫られた石造物はとりわけ圧巻である。

⑮相屋神社 あいじんじや
旧青屋村の氏神。相屋神と称し、祭神は茶目陀流神と阿夜詞古泥神で、創立年月日不詳であるが、『三代実録』(877)に記載されている国史所載の古き由緒ある神社である。以前は丸山に鎮座していたが、万治2年(1659)の大嵐のため社殿が埋没したため、同年現在地に移されたという。明治元年相屋神社と改称された。
相屋という名前は、藍屋、紺屋、青屋。青谷と関係があるようである。



⑭興宗寺 「三界万霊等」「十六羅漢石像」
三界万霊等(塔)とは、これを回向することで万霊を供養することを目的とするもので、日常多くの人から回向を受けやすい場所に建てられている。
これは天保13年(1842)名石工「川六」作のもの。大きな自然石をくりぬいて半跏坐(はんかざ)の菩薩が彫っており、その上部を天蓋(てんがい)がまるで屋根の如く覆っている造りは、みごとである。鳥取市指定文化財。
また、山門を入り右わきに十六羅漢石像がある。十六羅漢とは、永くこの世にあり、正方を護持し衆生を導くという16人の羅漢のこと。それぞれの施主は、当時の廻船問屋などがなっている。



⑬旧山陰道の中町通り
東西に通る中町のは心の通りは、江戸時代の山陰道(伯耆往来)であり、宿駅(飛脚の中継所)が置かれ、商家や旅館が並びにぎやかな通りであった。明治から大正にかけては、郵便局や銀行、駐在所なども置かれ、青屋の中心であった。

②潮津神社 うしおづじんじや
旧潮津村の氏神。もと王子権現と呼ばれ、多く荷主命と八上姫をまつが、明治になって稲荷大明神と菅原道真も合わせてまつている。境内には、安政4年(1857)石川六作のこま犬がある。

